
/Photon

柏木 柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

/ Photon

【Nコード】

N0550W

【作者名】

柏木 柊

【あらすじ】

人類は間引かれたのだ、神様によって……
フォトンベルト突入により、人類の3%は異常を来たし、暴走者となった。欲望に支配された奴等に襲われて、世界人口は半分まで減った。

それから三年、高校生の与一は姉と共に、塀に囲まれた街、クロードシティに逃げこんでいた。

しかし、正常な筈のクロードシティにも暴走者が現れる。

与一は仲間と、暴走者を相手に戦いに身を投じる。

学園& amp; 戦闘モノです。

超能力や特殊技能に目覚めます。

* Arcadiaと重複投稿しています。

/ photon / 01 / 序章、或いは導入

20x6年、地球はついにフォトンベルトに突入した。

フォトンベルトとは光子の帯であり、銀河を巡る太陽系ごと渦に呑まれた。

NASAは数ヶ月前に突入を予測。

人類にはなす術もなく、その必要性も感じなかった。

大半の人間は興味を持ち、突入のその日を知らない者は居なくなり、テレビやネットも一時騒然となる。

しかし、この時点で、こんな事、になるなんて考えた奴は居なかったんだ。

いや、一部の政治家と学者は知っていたのだらう。

ただ、どうにもならなかった。
力が及ばなかった。

限界でもあったのだらう。

要するに。

ただ単に。

唐突に。

なるべきようになっただけなのかもしれない。

もしかすると神様は人間を困らせたかったのだろうか。

そうだったら酷い神様だよ、全く。

20×6年、フォトンベルト突入。

同時に全生物の3%が異常をきたした。

知能の低い生物は暴走し、高い生物は欲望に吞まれた。

要するに理性が飛んだ。

体に掛かるリミッターを外した、暴走者、達は人類に牙を剥いた。

600000000000×0.03＝18000000000

一億八千万人の疲弊なき反乱は人類を疲弊させるには少し多すぎた
ようで。

今となれば神様は間引きがしたかつたとしか考えられない。

まあ、爆発的に増える人口のことを考えたら此処らで刈るのが一番
だったのかもと思う訳で。

結果、人類のきっかり半分が間引かれた。

6000000000000000000 × 0.5 = 3000000000000000

総人口：三十億人

暴走者：未だ殲滅に成功せず

暴走した人間は人間に非ず。

生きるためには、

どうしようも無い。

仕方が無い。

尚且つ変えようが無い。

絶対的なルールになるのに時間は掛からなかった。

お約束のように鳥のさえずりで眼が覚める。

とは言ってもこれは只の携帯のアラームであってそこまでベタな展開になり得てはいないのだが。

開き切らない眼を細めながら体を起こす。

六時半、割と余裕を持った時間である。

「与一、メシだから起きて来い！」

人を起こすのには些か大き過ぎる声で姉さんに声を掛けられるが、安アパートの壁はそんなに厚くないので隣の住民から壁を蹴られる。

「今行くよ」

此方は常識的な音量で返事を返し、カッターシャツを手に取りスラックスを履く。

今度、隣の部屋の人に何かお詫びを持って行かなきゃな。

それで、姉さんにも反省を促そう。

誰にとっても睡眠時間は貴重な筈なのだ。

「おはよう、姉さん」

制服に着替え終わった俺は台所でメシを食い始める。

今日は和食だが、昨日と一昨日はパン食でその前はスパゲッティだった。

これ等はまだ良い方で、朝からラーメンを出された時は正直目を疑った。

「今日はキチンと和食だね」

「こないだラーメン出したら、与一お前ブチ切れたじゃねえか」

食に対して文句を言う気は無いが、流石に限度があるんだよ。

その日から”姉さんの”普通（決して普通ではない）の朝メシが出る様にはなった。

7

此処で言及しようと思うがウチは姉さんと俺との二人暮らしである。

姉さんは高校生の俺よりも5歳年上の21歳。

美人。

非常識。

榊原千夜。

短く茶色く染めた髪と元ヤンの名残の男言葉で男よりも女性の方にモテている。

不可解並びに不愉快である。
俺に譲れ。

そして俺が榊原与一。

高校二年、背は高め、顔は普通、髪は黒。
名前の由来は那須与一から。

父からは大事な時に事を成せる男になる様に。

母からは人の心を射止める様な

イイ男になる様に。

名付けられた。

そして。

自己紹介は終わり。

これで終了。

二人でお終い。

二人だけである。

他の名乗るべき肉親は数年前の、隣人による悪夢、により死んでいくのだ。

―隣人による悪夢―

フォトンの影響で暴走した人類との戦い。

それも最初の、軍がまだ動けなかった頃の戦いのことを俗にそう言う。

（その頃は自衛隊が暴走者を殺すことは出来なかった）

名前の由来は簡単で、今生きている者なら誰しもが経験したことがある筈だ。

自分の知り合いにいきなり襲われるのだ。

数秒前はフォトンベルト突入と一緒に楽しみにしていた友人に、恋人に、家族に、いきなり襲われる。

人類の3%が暴走したと言われているが日本の場合は特に多かったようだ。

そして、

俺達の場合は家族に襲われた。

唯一無事だった姉さんを連れて俺は逃げ出した。

その後、家族がどうなったかは知らない。

その日から俺は姉さんを守ろうとしたし、姉さんは俺を庇おうとした。

それから37日間、俺達はこの塙の中の都市、クローズシティに保護されるまで、無秩序という名の荒地を彷徨い歩いていた。

/ Photon/02/アム、素晴ラシキノ世界(後書き)

初っ端からシリアス過ぎたかもしれないですが、そこんとこどうで
しょうか？

最初にインパクトを出そうという魂胆なのですが……
感想お待ちしております。

/ Photon / 02 - 2 (前書き)

十五分で二キロって走れるのでしょうか？
適性値がわかりかねます。

クローズドシティ。

閉まり切った街。

大きさは其れこそ都市一個分で、規模によりA B C Dに分かれており、俺が住む”横浜閉所”は11箇所あるAランクシティの一つである。

名前の通り、街と外とは厚く高い壁が隔てており、地区の境界にもフェンスが並んでいる。

その為、地区間を移動する時はまるで関所の様なゲートに個人カードを通さなければならない。

どれも暴走者対策である。

暴走が始まった時、何よりも早く進められたが都市の要塞化だ。

政治家というのは肝心なことは何も決めないのに保身だけは一生懸命だった。

要するに何が言いたいのかというのだ。

俺は今ゲートを潜ろうとしているのだが……

混む。

凄い混む。

ラッシュが起きるのだ。

朝のラッシュを舐めていた。

しかも、今日は三十程あるリーダーの内、六・七台が故障してラッシュに拍車をかけている。

因みに補足すると、今日から隣の地区の義灘高校に転校する。

去年の今ごろ入学した筈の高校に通っていた俺は、よく分らんが教育委員会から転校を勧められた。

風のウワサに謎の転校命令なるものは知っていたが、まさか自分が被害に合うとは思っていなかった。

しかも、下手に転校を支援をするもんだから姉さんが勝手に書類を作って出してしまったじゃないか。

まあ、俺もあのオンボロな部屋には困っていたので安いアパートを紹介してもらったのは嬉しかったのだが、今となったら良い様に丸め込まれたようで腹立たしい。

いや、そんなことはどうでもいいんだ。

本当に大事なのは此処からだ。

1・今日から二年生（正式には四月の頭からなのだが此処では気にしない）

2・しかも俺は転校生（第一印象というのはとても大事である）

3・時間まであと十五分（初日から遅刻するのは印象がよくない）

何としても遅刻は出来ない。

転校先で印象が悪くて友達が出来んとか最悪だろ？

しかし、俺は一体どうすればいいのだろうか？

このままでは確実に遅刻する。

何だかんだ考えてる間にリーダーに近づいているのもうすぐゲートを潜れるだろう。

しかし、此の世は無情。

刻々と時間は迫っているのだ。

リーダーにカードを通した俺は携帯電話を覗き、地図で学校の位地を再確認する。

残り時間十二分、残った距離は直線で二キロメートル。

二キロを十二分で走るのは大丈夫だ。

しかし実際はもっと長いし、信号もある。

頑張ってもギリギリで遅刻が関の山だろう。

「でも、大丈夫ッ！」

”正門”を目指せばトータルで三キロ弱走る目に合う。

しかし、”裏門”は？

「トータル二キロぴったしだ！」

そうと決めれば最短距離を突っ走る。

大通りから大きめの公園に入り込み、向こうの出入口まで走る。

息は上がり、心臓が鐘を打ち始めるが、そのままの速度を維持し続ける。

公園を出て五百メートル程ダッシュすれば裏門に着くのだ。
あと三分か。

ギリギリいける！

間に合った！

「ご用の方は正門から職員室へお越し下さい」

閉まり切った門には、俺を嘲笑うかの様に鍵が掛かっていた。

俺が大幅に遅刻したのは言うまでもないことだ、合掌。

/ Photon / 02 - 2 (後書き)

感想を頂けると更新速度が上がります、多分。

より分かり易い説明と言うのは理由は後から話すらしい。

何故なら理由から結論を探しだすよりも、結論を理由で補強していった方が分かり易いからだ。

このことは手段と目的の問答に似ていると思うのは俺だけだろうか。

目的とは自分に於いて至上であり、手段とはおまけのオマケで二次三の次で無ければならない。

目的の為なら全てを捨てるべきと。

自分が用いた手段に惑わせられる様では人は惑わせぬと。

いや、何を言っているのだと思うかもしれない。

しかし、自分でも分からないことは人には伝えられないのだ。

いやまあ、正直に言くと現実逃避な訳だ……

「悪い冗談だな。もしかすると夢なのかもしれない」

結論から言おう。

大失敗だ。

まず、遅刻気味、いや遅刻して飛び込んだ職員室の先生からお小言を食らった後、機嫌の悪い担当の先生に連れられ体育館へ。

すると、入った途端に全校生徒の前での自己紹介を求められる。

勿論、準備などしていない。

それ以上にシヨックだったのがこの高校が明らかな超進学高校であり、尚且つお坊ちゃん、お嬢様学校だったことだ。

カッターシャツの下に白いタンクトップとかあり得んだろ。

胸ポケットに白いハンカチとか初めて見たわ。

今日は黒いTシャツを下に着ていいいた俺は教室に入るとクラスメイトから不良扱いされた。

具体的には……まあ、言わぬが吉だ。

結構傷ついたと言っておこう。

無言があれ程恐ろしいとは思わなかった。

そして一度もクラスメイトから話し掛けられること無く帰路についてた。

怨むぞ、教育委員会。

俺の成績は中の上ぐらい。

ついていける気がしねえ。

唯一の救いがあるとすれば俺みたいな境遇のヤツはある程度この高校に集まっているらしい。

「コレで何人目だ？」と言う声が聞こえたので、ある程度間違いない。

明日にでも合流して傷を舐め合おう。

今思えば微温いと言うか。

柔いことを考えていたと思う。

いや、これは主観であり客観からすれば只の滑稽だったのだろう。

しかし、この程度の言い訳はさせてもらおう。

その時の俺は常識人だったのだ。

常識人である俺の敗因は、無知ではないだろう。

其れは、唯。

勝因が無かったただけなのだから。

俺の仮初の日常は
此処から崩れ行く。

/ P h o t o n / 0 2 - 3 (後書き)

感想が貰えれば泣いて喜びます。

/ Photon / 03 / あゝ、狂おしいこの世界

暴走者。

隣人による悪夢の間散々お世話になった相手である。

そいつ等に喰われかけたことは何度もあり、仲間がそいつ等に喰われるのを何度も見た。

暴走者は人の中でより質が悪い欲望、つまりは破壊欲求や、三大欲求に数えられる食欲、睡眠欲、性欲に従って行動する。

人の限界を超えた奴らに睡眠欲があつたのかは今の所意見が別れているが、俺はあると思っっている。

必要の有無は置いても、欲望は欲望として作用すると思うからだ。

奴らの服は大抵所々破れている。

その上に目が充血し、赤くなっていれば確実に暴走者だ。

他にも特徴はあるみたいだが、俺たちは服と目の色で人と暴走者を見分けていた。

殺すのには特に変わった知識は必要ない。

物理的に動かない様に筋肉、筋を切り落とすか、脳、心臓を潰したり血が減っても死ぬ。

毒でも死ぬし、多分酸欠でも死ぬ。

人と違うのは痛みを感じないぐらいなもんだ。

現在位置：自宅近く、人通りのない路地裏

時刻：PM六時半

眼前：暴走者

気づいたらそこにいた。

服は破れ、原形を留めていないがなんとかスカートを履いていると分かった。

髪は長く女だったことが伺える。

だかしかし、それは過去形であり、今は人ではない。

額に冷たい汗が伝う。

これが初めてではないが、慣れている訳でもない。

携帯電話はカバンの中であり、取り出すことは出来ない。

つまり通報は不可能。

俺は”もしも”の為に携帯しているナイフをズボンのポケットから取り出す。

親から貰った折り畳み式ナイフの肥後守と、昔拾った細長い投げナイフ。

俺は構え、奴は此方に走りだす。

胸を狙い投げナイフを投げるが心臓には届かない。

急所に入らないならばたいして意味はない。

痛みが無いから怯みもしない。

モーションから姿勢を立て直す前に距離を詰められた。

奴が腕を振り上げる。

慌てて射程内から抜け出すが、顔を庇った右腕に鈍い痛みが走った。

やられた……

これは……折れたかもしれないな。

折れていなくとも、まず使い物にはならない。

まずい。

まずい。

不味い。

これは本当にヤバい。

利き腕が潰されれば、まずまともには闘えない。

走って逃げるのもダメだ。

単純な力比べではこちらに分は無い。

今更ながら命の危機を感じた。

ある筈もない打開策を探し、目線を動かすと、奴の後ろに女の子がいた。

長い黒髪、暗いせいで表情は見えなかったが、立ち止まっていた。

その時の俺はパニックに陥っていたのだろう。

だから、

助けてくれとか、

警察を呼べとか、

こっちに来いとか

ではなく

「早く逃げろ？」

と叫んでいた。

その声に反応した奴がこちらに駆けて来た。

何故か既に覚悟は出来ていた。

守るモノが在るならば殺されても構わないと感じていた。
ナイフを動かない右手から左手に持ち替える。

相討ちぐらいなら何とかなる筈だ。

「さあ来い、クソ野郎お？黙って死にな？」

そう言つて俺はナイフを差し出し、奴は腕を振り下ろす。

左手にはグシヤリと肉を潰す感触が、右肩には骨を砕かれる感覚が訪れる。

「いッツツてえー」

焼けるような痺れるような痛み。

お互いに右肩を潰した合つた俺たちは距離を取り直す。

次できめる。

そう思つた次の瞬間。

パン！

乾いた破裂音がした。

目をやるとさっきの女の子が銃を空に向けていた。

途端に奴は女の子の方に向かって走りだす。

「あんの阿呆ツ、逃げろつて言つただろ！」

銃などは簡単に手に入る。

しかし、使える人は少ない。

直接撃たないのならば、それは撃てないのと同じこと。

助けようとしたのだらうが、あの女の子は多分撃つことが出来ない。
人の形をしたモノを殺すのに躊躇するとその一瞬の隙を突かれる。

しかし、奴はこちらに背を向けている。

一度きりのチャンスにもなりえた。

最後の賭けだ。

勝率は半分よりも少ないが、

「其れだけあれば十二分だ！」

背を向け走る奴の背中に左手でなんとか最後のナイフを投げつけ、

一瞬の動きを止める。

素手で闘うことになるが関係ない。

どうせここでできまらなければ役には立たない。

俺は息を吸って、駆け出しそして、奴の背中にドロップキックを決めた。

いや、正確には”背中はやや左よりに突き刺さったナイフ”にだ。

投げただけでは刺さり切らなかつたナイフが深々と突き刺さり、左胸から顔を出す。

奴の胸からは大量の血が溢れ出し、俺には勿論、女の子にも血が掛かってしまっていた。

こうして奴は倒れ伏し、女の子の顔を覗こうとした俺も崩れ落ちたのだった。

薄れゆく意識の中で「女の子の顔見れなかつたな……」なんてことを考えていた。

/ Photon / 03 / あゝ、狂おしいこの世界（後書き）

バトルは難しいデスね…
更新が大分遅れました…

目が覚めると知らない天井だった。

という訳ではなく、夜の曇り空が広がっていた。

どうやら俺はあれからずっと寝ていたらしい。

携帯を開いて時間を見ると8時が近い。

というより……

「普通置いていくかよ、あのクソ女！」

あの女（旧女の子）は逃げたのか？

普通救急車とか呼ばね？

知らない天井が広がっていて然りだろ？

今更ながら顔を見ていないのが悔やまれる。

メンが割れていれば調べるのが楽なのに。

まあパニックっても仕方がない。

すると突然携帯からメールのコールが鳴った。

メールの差出人は姉さん x 未読64件 & a m p . 不在着信27件 (全部姉さん)。

渋々帰路についた俺を待っていたのは姉さんの説教だった。

渋々帰路についた俺を待っていたのは姉さんの説教だった。

ちくしょう、昨日のアレは何だったんだ？

大体暴走者が居ないことがウリのクローズドシティに何故暴走者が居るのだろうか。

塀が破られる筈は無いし、関所だけはこのご時世でも有人なのである。

破られる筈が無いし、破れたとしてもすぐさま軍が動く。

あり得ないのだ。

しかし、事実なのだから仕方がない。

仕方がなくないのはその後だ。

助けた筈の女には置いていかれるし、姉さんからは魅惑の日越し御説教（勿論正座）、形見のナイフも失くしてしまった。

元を辿ればあの女の所為であり……

「…いつか解してやる」

「だれ…何をなのかな？」

美人に話しかけられた。

四時間目の授業が終わり、独り
弁当箱を開けていた。

一人で弁当を食ってる時な話しかけるといのは案外恥ずかしいもんだな。

しかし俺は不幸な誤解を解き切れていないので仕方のないことなのだ。

「聞こえているのかい？」

「……ああ、聞こえてるぜ、生徒会長サン」

そう、この美人こそがこの学校の生徒会長だ。

クリクリとした目と少し色の抜けた茶髪に少しパーマをかけていて、可愛らしい顔立ちをしている。

まあ、知り合いという訳でもなく、体育館の壇上で喋っていたのを見ただけだ。

しかし、「バラす」？「誰？」と言った所を見るとこの人も不幸の中を、生き残った、らしい。

しかし、この学校の生徒会長が俺に直接用事があるというのだろうか

か。

このデカイ学校ならば生徒会はとても忙しそうだ。

こんなことで時間を潰す様なことはしたくないんじゃないか？

「んでもって会長サンが俺なんかは何の用だ？幾ら用事があつたとしてもそんな野暮用下っ端に任せればいいだろ」

「そうかな？まあ確かに暇を持って余してる訳じゃあないけどね」

やはり、暇という訳ではないらしい。

では会長自ら赴くほどの大事な用なのか。

いや、それなら昼まで待つような悠長な真似はしないように思えるし、大事な用でもやはり生徒会室に呼ぶなりなんなりするだろう。

それではつまりー

「この件に関わる人間は出来るだけ少ない方がいいということか」

「そゆこと。因みに細かく言えば機密保持の為だよ」

「…どついついことだ」

「ここで見えるのはここまでね。続きは放課後このメモに書かれた

所に来て。そしてそのメモは読んだら確実に読めないように塗りつぶすこと。」

生徒会長は俺の掌の中にルーズリーの切れ端を押し込むと何処かに行ってしまった。

この学校に来てから生徒会長に呼ばれることをした覚えはない。

それでも何か有るとすれば――

アレしかないんだろうな。

俺はやっと取り戻した日常が、手から零れ落ちそうになっているのを感じた。

放課後、無人の廊下を一人で歩く。

どうして無人なのかというと、何故か、緊急の会議があり、部活動が中止になったからだ。

ここまでするか？

いや、ここまでするのが当たり前だろうな。

実際、この街で暴走者なんてA級の機密だろう。

ということは……

俺は今から口封じをされるのか？

確かに確実に秘密を守るには秘密を知ったヤツを潰すに限るのだが

……

嘘だろ？

戦々恐々としている間に生徒会室についてしまった。

ドアの前で躊躇するが、どうせ入らなくても向こうの手間が増える

だけで捕まるのは必然だ。

ドアに手を掛け、恐る恐るスライドさせる。

中は教室の半分より少し小さい程度の部屋だった。

その部屋も大半がデスクに面積を取られている。

そして、誰も居なかった。

……

騙されたか？

騙された様だった。

待ち合わせの場所も間違えてはいない。

ここには誰かがいる筈なのだが。

不意に重力が無くなった。

数瞬後に背中に衝撃を受ける。

天井が正面に見えてやっと投げ飛ばされたことに気づいた。

ああ。

完全に油断していた。

小難しい方法を用いて緊張させ、それを解いたところの際を付く。

緻密なプランである。

それに加えて投げ技。

近づいてくるのに気付かせずに、投げる。

俺もそこそこのケンカスキルが有るから分かるが、これは武道有段者の技だ。

一切の抵抗ができなかった。

とつか、息ができねえ。

息を整え、立ち上がるとさっき俺がいた出入口に長身ポニテの女が立っていた。

「こんなもんかね、期待してたんだがな」

そう言って女が距離を詰めてくる。

一気に詰める様なことをせずに焦らすような間合の詰め方は逃げ口

を塞いだ者の余裕だった。

俺は部屋の奥に逃げ込み、側にあつた椅子と画鋏を手取る。

「無駄なのに、がっかりだね」

ゆっくりと歩を進める女。

俺は椅子を振り上げる。

一瞬女の動きが止まった。

そして、その椅子を窓に叩きつけた。

強烈な、金属音、が部屋に響き渡る。

窓ガラスは硬質ガラスだ。

ガラスは割れない。

しかし、窓枠はその限りではない。

鍵の部分に蹴りを入れ、窓を外してそこから逃げ出し、オマケで画鋏を撒いておいた。

女は裸足だろう。

投げ技するなら足の裏の裏のグリップは必須だからな。

俺に武道有段者と戦うような術は無い。

手に持った武器で応戦するように見せかけ、動きが止まったところを逃げ出す。

すぐに逃げ出せたのはラッキーだった。

この作戦はスピード命だからな。

窓から中庭までは一本道である。

多分、俺を殺す気は無かったのだろう。

殺す気なら体術よりも銃の方が手っ取り早い。

畜生。

あの会長、いつか化けの皮剥いでやらんと気が済まん。

「あれ？美郷先生に襲われなかった？君は気絶させる腹積もりだったのだけだな」

後ろを向くとそこには会長が立っていた。

「まあ、いいか。さっきのは歓迎の気持ちとして受け取っておいてね」

「何がしたい」

俺は問う。

「君を招待するんだよ」

彼女は答えた。

/ P h o t o n / 0 3 - 4 (後書き)

自分的には上手く書けたと思うのですが……
感想があると更新速度がリアルに上がります。

「実際の所、さっきのは場所を知られなくなかったんだよ。気絶させたままに運び込めば場所なんて知りようがないからね。まあ、どっちでもいいんだけど」

今、俺は校舎の4階にいる。

4階には生徒会の会議室と倉庫と屋上に続くドアしかないので一般の生徒は立ち入り禁止になっているらしい。

「会議室に用があるのか？」

「違うよ、用があるのはー」

会長がドアを開けると丁度夕焼けが目に入る。

「屋上だね」

またもや屋上には誰もいない。

ただ、広い屋上があるだけだった。

いや、ホントに広いな。

……広過ぎないか？

「なあ、会長。この屋上、どういう事だ？」

「そつゆつことだよ」

どういふ事だ！

分かりづらいがこれは明らかに教室や廊下を合わせた面積よりも、屋上の方が広い。

ということとは……隠し部屋？

「分かったみたいだね。これ隠し通すのホント大変なんだから」

「聞いておくけど、こればれたらどうなんの？」

「ん〜……抹消？」

怖えよ、おい！

何を消すつもりなのか、とても気になるところだった。

「ついておいでよ」

会長は屋上の端の方に移動し、おもむろに床のコンクリを探り始めた。

暫く探るとコンクリの割れ目を見つけだし、そこに鍵を差し込む。

すると、ガコンという音と共に後ろの水タンクから蓋が落ちて来た。

……マジかよ。

「誰にも言わないでね」

「言えねえよ、バカ」

「うん？何か言ったかな？」

「すみませんでした」

チキンがいた。

と言っか俺だった。

「蓋拾っとしてよ」

「はい……」

なんか上下関係が決まった気がするんだが……

タンクの中の梯子を使い降りていくと綺麗な廊下が真っ直ぐに伸びていた。

左側には等間隔にドアが、右側には打ちっ放しのコンクリが続いている。

窓はないので、蛍光灯の人工的な明かりが灯っている。

廊下もそこまで広くなく、人がすれ違うのがやっとぐらいの広さだ。

まあ、隠し部屋に多くを望むのは酷か。

廊下を進み「会議室A」と書いてあるドアを開けると中には五人の男女がいた。

「ようこそ！私達の城へ！」

会長は嬉しそうだった。

／Photon／04／啞々、我等がこの世界（後書き）

感想があれば泣いて喜びます。

「あの子達の自己紹介は後にするわ。その前にあなたがお帰りにならないかもしれないけどね」

座って、と席を勧められた後に会長が俺の正面に座る。

さっきの五人はこの部屋から出て行った。

どうも俺が気になってここにいただけらしい。

「長い話だけど、いいかしら？」

そう前置きを置いて、会長は話し始める。

「暴走者ってなんであなるか知ってる？」

「……フォトンベルトに突入したことによって生物の遺伝子情報がイカれてあなったと聞いたことがある」

「まあ、簡単に言えばそんな感じね。フォトンベルトによって遺伝子情報に干渉された人は簡単な話、イカれてしまう。自己を見失い欲に溺れる訳ね。しかし問題はそこではないの。遺伝子情報が組み変わっても暴走者しない人がいるのよ」

「どづいことだ？」

「突き詰めれば簡単なことなのよ。例えば、何十個の積み木をランダムに重ねていったとする。大体の積み木は崩れるけど、何回か崩れない積み木ができるのよ。つまり、遺伝子情報がランダムに組み変わっても、奇跡的に理性が崩壊しない人がいるの。これに関しては本当に偶然。また、その中に遺伝子情報が変わったことによつて生命活動を行なうことが出来なくなる人がでる。いや、大抵の人は死んでしまつわ。当たり前ね。遺伝子が組み変わるつてことは人体を組み変えるのと同義なのだから。しかし、それでもまだ生きている人がいる。遺伝子情報が変わつて、何かしらの変化が体に起こつた上で生きている人、そんな人達のことを私達は覚醒者と呼んでいる」

至つて信じ難い話だが、これが真実であると本能が告げている。

何より、この話に矛盾点が見つからない。

「何を他人事みたいな顔してんのよ。あなたも覚醒者ですからね」

は？

「あなたね、生身の人間一人で暴走者を倒すなんて相当難しいのよ。暴走者には武道有段者ぐらいの強さはあるの。多分あなたも覚醒したのね。そう考えればあなたが暴走者を殺せるのにも納得がいくもの」

「……覚醒者つて戦闘力が上がったたり、超能力が使えたりするのよ」

「それこそ覚醒の仕方に寄るわね。ただ、わかっているのは覚醒者

は一定の象徴の元に覚醒する。因みに私の象徴は、王、よ」

「王？ だったら強くなったりするの？」

「いいえ、全く逆。弱くなる。将棋やチェスみたいな感じで、たいして強い訳ではないのよ。その代わりに人に顔がきくようになったわね。カリスマってやつ？」

「じゃ、じゃあ俺は？」

「知らないわよ、そんなこと」

知らないのかよ！

テンション上がってしまった自分が恥ずかしい。

会長は構わず話を進める。

「その象徴つてのは沢山あってね、中には全く役に立たない能力もあるわ。私の知り合いだと、音感、って人がいるの。文字通り絶対音感があるだけね」

あんまりだな……

可哀想過ぎる……

象徴は唯の象徴であってメリットだけの都合の良いものでは無いらしい。

「ここからが本題よ」

会長の眼が鋭くなる。

「今の所、政府は暴走者を殺し尽くせるような手段を持っていない」

「だからこそ、人は塀の中に、いや、檻の中に逃げ込んだ」

「しかし、この世に穴無きものなど有りはしないの」

「人は潜り、潜り込む」

「人に非ずとも変わりはない」

「それを縛り、抑え込む」

「人に非ずとも容赦はしない」

そう言つて会長は笑った。

俺は笑わなかった。

いや、笑えなかった。

何と見えていて悲しくなる様な、自虐的な笑みだった。

「そう、あなたには対暴走者の部隊に入って欲しいの。勿論、安全は保証できないし、手当ては出るけど、決して命と天秤に掛けられる様な金額ではないわ。それでも、受けて欲しい」

会長は泣きそうな顔をしていた。

いや、既に泣いているような儂げな表情だった。

「私事の話なんだけどね。私には弟がいたの。詳しいことは言いたくないけど、自分の無力と仲間の臆病のせいで死んでしまった」

その眼には哀愁と、微かな憎悪が浮かんでいた。

「自分の無力はどうにもならないの。王として覚醒した限りわね。それでも、信頼できる仲間なら、自分でも集めることができた。あなたも私についてきてほしい。違いわ、私の復讐に付き合っ欲しい。」

会長の覚悟が見えた気がした。

俺の覚悟はどうなのだろうか。

俺は暴走者にはっきりとした恨みを抱いてはいない。

何故なら暴走者を恨むということは暴走した家族を恨むと同義と感じてしまうからだ。

暴走者にも人間だった頃がある筈なのだ。

そして、大抵の人の生活は幸せだった筈だ。

出来れば救ってやりたいと思う。

元の生活に、大切な人を守れる様な人に戻してやりたいと思う。

しかし、それは叶わない。

だが、死という形での救いは与えられる。

この世の鬼となった暴走者を天国に送ることで与える救い。

それは最善では無くとも、悪では無いような気がした。

だからー

「自己紹介がまだだったな。榊原与一だ、これから、よろしく」

そう言って、右手を前に出す。

「御被七重よ、よろしくね」

会長はしっかりと俺の手を握った。

会長は笑っていた。

儂くも、心惹かれるような、強さを持った笑みだった。

/ Photon / 04 - 2 (後書き)

キャラの名前作りが意外と難しいです。
名前のセンスが悪いかもしれないですね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0550w/>

/Photon

2011年10月10日10時58分発行